

7/20  
丁卯日

## 山中を歩いて38度線越えた

無職

(石川県 87)

45年8月15日、ソウルの叔父の家から洋裁学校に通っていた私は、夏休みで元山(今の北朝鮮江原道)に住むいとこ宅を訪ねていました。

早朝、近くの元山海軍航空隊の飛行機がどんどん日本の方へ飛び去るのが見え、なぜかなと思いましたが。正午、天皇陛下の放送は「しのびがたきしのび」と聞かされたので「もっと国民みんな頑張れ」と言っていると思っていました。皆が敗戦と分からぬまま、ソウルに逃げる特別列車が仕立てられました。いとこには小さい子供たちがいるため列車に乗るのは

無理だと、私たちは残りました。

日本軍も警察もない町ではロシア兵が「マダムタワイタワ」女を出せ、と銃を持ち白昼現れます。17歳の私は屋根裏に隠れました。隣人の14歳の少女はロシア兵に連れ去られ戻りませんでした。

秋にはお金を渡し漁船で脱出を試みて失敗。翌年夏に再び朝鮮人の保安官に金品を渡して脱出しました。列車に乗り、38度線の手前で降ろされるとまた保安官がいて荷物を奪います。夜に山中を歩き38度線を越え米軍支配地域に入りました。お盆のころ両親のいる金沢に到着。戦争を起こすのは常に国を動かす側の人です。戦争は起こってはならぬと願うのみです。

## 抑留 カエルやヘビ奪い合う

農業

(徳島県 96)

1945(昭和20)年8月15日の直前と、その後の悲惨な事態を思い深き今も忘れられません。

私は旧ソ連と旧満州(中国東北部)国境の牡丹江に駐屯する関東軍自動車第3連隊で、約50車両と兵約1200人を指揮統率する中隊長でした。国境紛争を想定し、部下を指揮して国境守備の訓練に明け暮れる日々でした。

8月9日、ソ連軍が国境を突破し、戦車と戦闘機で総攻撃を開始しました。車は焼かれ、現地の人や戦友の死体が道の一面に横たわりました。みじめな敗戦でした。

食うに物なく、持っていた腕時計や万年筆などを食品と交換し飢

えをしのぎますが、それも長続きせず。2カ月後に捕虜となりシベ

リア鉄道の貨車で走り続けること30日間、モスクワの東1千キロのエルツァカ収容所で労力奉仕を命じられました。出向いた農場では原木運搬とバレイシヨの収穫作業。食事は1日2食でトウモロコシが浮いた岩塩スープがコップ一杯、黒パンが数切れ。常に飢え、畑のバレイシヨをかじり、カエルやヘビを見つけたら、ごちそうだと奪い合いました。多数の戦友が零下40度の寒さと飢え、強制労働のため亡くなりました。骨と皮のみになりつつ生き延びて47年11月帰国。

新たな安保法制が今、押し進められています。永久不戦を誓う日本は、それを責めべきです。